
碧草

Keiたま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧草

【Nコード】

N4706L

【作者名】

Keiたま

【あらすじ】

片田舎の古民家に引っ越してきた、ある女の新たな日常の物語。

ある女（前書き）

…思いっきり、行き当たりばったりの物語です。

初心者丸出しなので、目に余る処は多大にありましようが、どうぞ
よしなにお願ひ致します。

もちろん、お叱りやアドバイスは嬉々として頂戴致します。

ある女

「さて…」

ぐるっと辺りを見回す。幾つもの段ボールが積み重ねられた部屋。数日前に引越しを済ませたばかりで全然手をつけていない。やる前から鬱々する気を何とか奮い立たせて腕捲り。じゃないと必要な物とかどこにあるか分かりやしない。

あたしがここに引越した理由は単に現実逃避だった。仕事や私生活で煩わしい人間関係や、新人時代とは違い日々の生活にもぬるま湯に浸かって折り合いをつけて過ごす事にも逃げたかった。そんな時、遠縁の親戚が家を持っていて借り手を探していると耳にした。別段、必死こいて借り手を探している訳ではなく、いないならないうで取り壊すつもりでいたらしい。古民家だと聞いて興味を持ち、訪ねていったところこれがナカナカ。囲炉裏も使おうと思えば面倒臭いがセツトさえすれば使える。土間なのに台所は現代文化バツチリ。所々チグハグながらも現代人としては好ましいので嬉々として受け入れる。とまあ早い話氣に入って。仕事をどうしよう、これから通勤はかなりキツイぞ、と悩んでいたところあっさり倒産。これはもう引越すしかないでしょ　と浮き足たちながら半ば後先考えず此方にやって来た、ということになる。新しい我が家は隣県、と言っても元居たところも此方も県境だった為さほど距離は離れていない。まあ此方が若干、緑が多いなど、民家もそこそこだな、と思うぐらいか。夜中に元氣に追いかけてこするいい大人達がいらないことは、大変好感できるところだ。

「どっから手をつけるべきやら…」

引越す経由を思い起こすも、ただの逃げでしかない。目の前の荷

物が片付くはずもないので現実に戻ることにした。

数時間後

片づけ始めてどの位時間が経過しただろう…。

「お腹すいた…食材どこだ、鍋はどこだ」

——状況…全然片付かず。寧ろ散らかした為悪化。

…こほんっ。えー、皆様にも見に覚えがある事と思います。アルバムやら昔、収集していた物やら…出てくると思い出にふけていこうに片付かない事が。今、正に、その状態です。

「…って誰に言い訳している自分。ここに食べるところ在ったかなあゝ」

何分、一人暮らしが長い。悲しいかな、独り言に加えて最近テレビと話す。

自覚をしたら余計にお腹が好いてしまい、片づけは一時中断。かわいく食べ物要求する我胃袋へ何かしら突っ込むために、いざ出陣！

いつの間にやら日が暮れていて、ポツポツある民家の明かりと電灯が夜道を照らす。昨日までの食事はあらかじめ、スーパーで買い溜めしておいたパンやカップ麺やら弁当やらで済ませていたが、流石に暖かいごはんが恋しい。何より食料切れだ。よし！ここはひとつ、夜道を散歩しながら星を眺めて素敵な店を探そうじゃないか！！

《ゲコツ…グアーッ》 《グアーッ グアーッ》

… 田んぼ、多いもんね。誰もツツコンでくれないのは虚しいものがある。それよりも。

「素敵じゃなくても、開いてるお店あるかな…」

口にすれば急に不安になる。項垂れて歩く姿は一般人から不審者へと早変わり。

あたしの家は割と外れたところにある。30分程歩いただろうか。

「…ここお店？でも普通のお宅、よね…？」

特徴を挙げるなら、色が黒いお宅。ライトが点いて居なければ闇夜に溶け込んで気付かず通り過ぎたろう。純和風家屋でも今時な夢みる様な洋風でもない、普通のお家。その玄関の処に簡易ライトを両端につけた看板が。『かたりべ』

「うーん：小料理屋？だったら願った：り？」

首を傾げ考えているとふっと視界の隅にとらえた姿。

特徴がもう一つ追加された――今時珍しい、帳簿を下げた陶器の狸。が持たされている提灯。

「：こ、こんばんは」

ガラガラと横にとを滑らせ開けて中へとはいる。

狸さんは右手に帳簿を左手『側』

といった方が正しいのだろうか、無理矢理提灯をつけた棒をもたされた格好だった。そこいらで見繕った竹の棒をどうにか胴体へとくっ付けたいらしい。先に『御食事処』と炭で書かれた赤い提灯をぶら下げていた。

ここのご主人は凝り性なのか単に変わり者なのか：多少不安になりながらも食事ができるとわかり中へと入ってみることにしたのだった。

美人と満腹

コトツと小さく音をたて湯呑みを置く。

「ふいー…」

「ふふっ、御粗末様でした」

食後のお茶を飲んでオヤジくさく一息つくあたし。そんなあたしに、柔らかい笑みでもって声をかけてくれたのはこの店主、早苗さん。

「あ、すみません。でもおいしかったあ…あたし揚げ出し豆腐にハマリそう…ああ和食って体に優しい」

「あら。お口に合ったようで何よりだわ。その口ぶりからして和食はあまり？」

「ええ。煮物とか子供の時は苦手で。だから一人暮らしはじめてからは和食なんて遠のいてましたよ。っていうより手料理事態からものですけど。お恥ずかしながら。」

仕事が忙しいと帰ってから作るのも面倒、しかも一人分、なんて全く優しくない。今時は買った方が時間も財布にもエコロジーなのだ。なんて言い訳してみたり。

「そうよね、あたしも和食の良さがわかったのは成人して大分経ってからだったわ。…やっぱり年取ると体が求めちゃうのね」

と、頬に片手を添えながらため息混じりに言う彼女。決して派手とはいえない、むしろ地味な、小袖に割烹着の姿。一昔前のおかあちゃんを連想させる。が、それは彼女の魅力をより一層艶かしく映す引き立て役。

—（美人だわー早苗さん。美人だ。なんでこんな田舎に美人？…いや、それはいいんだけど。美人なうえに料理上手…グッジョブあたし！目指せ常連！） —なんて心情を露とも出さずにあたしは口を開く。友人からも、もちっと表情出せや、なんて評価のあるポー

カーフェイスで。

「いやいや、早苗さんあたしとさほど歳違わないんじゃないですか？…雰囲氣的に年上かな？とは推察しますが…」

童顔、というわけではないけれど、下手すればあたしよりも2、3つ下に見える彼女。それでも年上かな？と思わせるのはやはりそれなりに人生経験を伺わせる落ち着きさ。仕草や言動だったりもね。

「あらやだ、あたしにお世辞なんて言ってどうするの。ふふっ、でもありがとう」

「やっだーお世辞なもんですか、本当の事ですよ！…実際お幾つで？」

冗談半分好奇心半分で口を滑らしたあたしはこの時の早苗さんの笑顔を忘れない。そして二度と口にすまいと固く誓ったのは余談、だ。うん。

二日酔い知らず

スウと浮き上がる感覚で静かに目覚める。ここに来るまでは目覚める為に人工的な不愉快な音で強制的に起こされていた。

「…くっ、はあ…好きなだけ寝れて自然と目覚めると寝起きって良いのね…」

しかし流石に寝過ぎたかもしれない。何だか日の強さが…。ハッと、時計を見ると

「じゅ…11時…!？」

完璧寝すぎた。かえってダルくなる。

「あー…そうか、あれからお酒呑んだんだっけ？」

早苗さんの年齢にはノータッチ、と判明してから少し間ができてしまった。だから 帰ろっかな〜 と思ったところでガラリと扉が開いた。

「いらっしやい…あら哲君。お疲れ様」

「こんばんは早苗さん。お邪魔するよ、お腹空いちゃって…」

頭に片手を当て笑いながらカウンターへとやって来る“てつ君”。

「…あれ？珍しいお客さん…」

「こんばんは」

あたしにも気付いたようなので一応挨拶してみる。

角刈り頭に眼鏡をかけた穏やかそうな顔立ち。体つきもそこそ良くて、イマドキなチャラチャラした感の男性とは程遠いも、きつと彼はあたしより年下。かな？

「ま、飲め！酒は飲んで吞まれて吐いて強くなるっ！」

「ひいー何ですかっ先輩、その意味不明な根拠は！早苗さん助けて

え！」

郷原 哲太 君、26歳。役場勤めな公務員で現在彼女募集中。お父さんは一昨年癌で他界。気ままに野良仕事しつつ年金生活する母と二人暮らし。血を分けた妹さんは昨年の暮れに嫁いで現在身重。もう少ししたらこちらに帰ってくるそう。

「ふーん、お兄ちゃん先越されちゃったね」

入ってきたときから何か見覚えあるなあ、と思って当たり障りの無い会話すること5分。哲太君もあれ？と思っていたらしく何か二人で腹の探りあいをしていた。見兼ねた、だろうなあ、あの顔…早苗さんが

「こちら最近越してきたばかりらしいの…哲君、転居届けの時見かけたんじゃない？」

それで ああ、そうか、と二人して事件解決となったわけだ。それからはまあ…あたしがよろしくと、年下だったのも気軽に絡んでしまい。久々に浴びるほど飲んでしまったのだった。

「しかし、我ながらあの千鳥足でよく帰ってこれたもんだ…」
所々記憶があやふやながらも、きちんと帰宅までの記憶はある。と、回想したところでアタシは思い出したことが。

「…うーん、出ていっちゃったかな？」

寢床に居ないことでそう思うも、確認しようと外に出るべく縁側へと向かった。

ある出会い

それは昨夜の帰り道。千鳥足で、にへにへ何が面白いのか頬の肉を無駄に緩めて帰っている

「…ん？神社？」

暗闇の中でもなお存在を主張するかの如く浮かび上がる赤。 昼間に見る鮮やかさはないものの、鳥居の形が良くわかる。と、その近くの茂み、それも地面近くに浮かび上がる白いもの。

「!…？」

一瞬ギクリとしたが、無駄に年を重ねた分だけ肝も据わってきたようだ。

『子犬？…怪我でもしてるのかな？』

警戒はしている、ようにも見える。が、その場から立ち去らないのは恐怖からか、隙を狙っているからか…

「…行くよー行っちゃうよー怖くないからねー」

大の動物好きであるアタシは我慢ができず近づいて行った。って、酔っ払いに我慢ができるかってね。本能のままに動きましたとも。

『…ズリッ…ズッ』

警戒から逃げようとするも、身体が思うように動かないのだろうか。近づいてみると狐にも見える子犬、だよね？は焦ったように身体を無理矢理引き摺って後退する。

「うーん…近くづくのやめた方がいいかな…でも怪我してるみたいだし…子犬だからほっとくつと…危ないよね…？」

希望に満ちていた若かりし頃、動物関連の職業も目指していた。たまたま雑誌の広告で通信教育にペットケアなるものを目にし、アルバイトで稼いで自己満足な勉強に励んだもんだ。そんな青春の一コマがここで役立つとは。

その後警戒しながらも、あっさりアタシにかっ拐われた狐子犬は、ルンルン気分のアタシに手当てされ抱き枕の如く布団に押しやられたのだ。

「おーい、ワンちゃん？」

半ば諦めながらも一応探してみる。

まあ家からはさほど離れはしないので、本当に気休め程度な探し方であるが。

そろそろ良いか、と思ったのは裏手の山に通じるハイキング道にいたとき。

ハイキング道なんていっても地元民しか使わないから草ぼうぼう、

かろうじて通り道がわかる位なのだが。

ガサガサ音をたてもと来た道を辿る。

あーあ、残念。懐いてくれたら家族に迎えたのに……

そんなことを考えていたから気付かなかった。アタシ以外に人が居たことに。

といっても子供だけだ。

なんとなしにクルッと振り返ったらいたんだな。バツチリ目もあった。

可愛い顔立ち。柔らかそうな、茶色の髪。多分あれは天然物だろうな、色素が薄いんだー羨ましい。

なんてツラツラ頭で思うも――

印象的なのは『瞳』だった。

蔑むかのような子供らしくない冷たい瞳。

そんなアタシはブツブツどころかでっかい独り言いう、大人らしくない痛い人でした、まる

ある出会い（後書き）

大した展開もなく申し訳ないです…

御拝読ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4706/>

碧草

2011年10月7日01時28分発行